毎月一回15日発行昭和49年3月15日発行・第51号（昭和45年9月4日第三種郵便物認可）

リベルテール

3 月 号

Libertaire VoL.V,No5

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可
昭和四十九年三月十五日発行第五十一号

定価一〇〇円（送料共）

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナルシズムは永遠の思想であり、普辺の思想である。これを歴史的、地理的、社会学的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。

それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナルシズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立って、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナルシスト（リベルテール）のグループであることに変りはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとずくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変りはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴に対して暴をもってすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上に困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦を戦かう　（三浦）

目次

巻頭言　熱田斉孝
時評　鈴木光一
ラディカルとアナキズム　山中邦久
パトスの神話　―1―　小田光雄
清水過渡期論批判　高田克穂
野火

表紙のことば

今日もまたヤマをふんでしまった・・・。
ひとつヤマふみゃホンダラッタホイホイ、
ふんでもふんでもホンダラッタホイホイ。

外道祭司・青井知三

巻頭言

熱田斉孝

物情騒然という言葉がピッタリの最近の世相である。―栄光の未来はすでに人類になく、あるものはこれまで積み重ねてきた罪業かのようだ。

うすっぺらな価値観は粉砕された。資本主義が／自己解体／の運動を始めているのだ。ただし、それが人類のより根源的な共同体をもともに破壊する可能性があるという点は注意を必要とする。

だが、現在話題にのぼっているような事件、企業の公害・買占めなどの悪事にアナキストは怒る必要はない。むしろ笑えばよいのである。自分で自分の首をしめてくれているのだ。民衆に、今まで見えないことを懇切丁寧に見せてくれているのだ。民衆への最良の教育なのだ。

アナキストがなかなか自力でなせなかった啓蒙をしているのだから御苦労さんとでも言うべきである。

我々はこういう時こそこう考えよう。

最近はやりだした爆弾斗争などや一発やってやろうというムダな風潮を一切忘れて、資本主義体制の自壊作用を注視しつつ、やるべきことだけ的確にやっていこう。

地域社会の探索、自然発生的暴動が起きたときいかに共同体を達成し、物質を平等に分配し、工場を自主管理し、全国につなげていくか、都市と農村の真の連結、等々。

複雑にからまっている社会の、しかもいざという時必要な情報は洗い出されていないのだ。―ハデなことばかりに目をうばわれていると、情況に対応した行動のとれない役立ずのアナキストになりますよ。

一寸先は闇だ。我々は闇に輝く松明だ。松明にしめり気をおびさせてはならない。

真昼にあわててあかりをともしても御愛敬でしかない。一生は短くまた長い。要は使い方ひとつだ。じっくり準備して機会をつかみさえすれば、おのずから道は開けるのだ。

時評

ソルジェニツィン・ソ連追放・その他

鈴木光一

ソルジェニツィンが、ソ連を追放された。追放のための法的根拠を（読売一九七四・二・十三朝）は著作権法違反か、と伝えている。それによるとソ連国民は海外で出版する時、必ず著作権協会を通じなければいけないことになっているそうだ。もしこの法律が事実なら犯罪はまさに成立しているといわねばならないであろう。もちろん、その罰則が追放か、どうかはわからないのであるが。

法律というのは掟として出発したのは人の知る所である。犯罪における法律の発展としては、他に対する損害の賠償をやがて、権力者対被権力者の間で契約した。ここにおいても法律というものは他に対する損害の賠償として罪を定めたのである。ところが今日、国家に対する損害の賠償として個人の負担を要求されている。

ソ連におけるこのような傾向は何人も注意しなければならないことである。権力者対被権力者の関係においては「法の支配者」対被「法の支配者」の関係がなりたつのかもしれない。このことはそして、ソ連のみのことではないのである。民主主義がもし「国家という個人の負担を要求するもの」においてのみ可能なのだとしたら、社会主義国家と自から言う国家と、民主主義と自から名のる国家と、人々はいづれをもえらばないであろう。

国家に対する個人のなしうる「損失をかけえる行為」とは何であろうか。通常破壊行為は一般的刑法で処断できるのである。このように一般刑法にふれず「国家に損失をあたえる」個人の行為を国家は個人にその責を求めることができるであろうか。

ソ連においては、海外における出版には著作権協会を通じなければならない、という法律があるようである。はたして同協会を通ぜず出版をした時、誰が損をするであろうか。不利益を受ける人々がいないにかかわらず、もしこの法に罰則があるとするならば、この法自体、反体制運動に対する治安目的の悪法のそしりをまぬがれないであろう。そもそも出版のような行為は自由行為でなければならないにかかわらず、法があるというのは、海外における海賊出版防止のためとはいえ、悪しきことにほかならない。

ソルジェニツィン自身についていえば、反ソ国家の宣伝にひきあいに出されすぎたきらいはあるが、名誉欲の

ようなものがあるのは指摘されねばならない。彼に対する評価はそれらの名誉欲が表現の自由のための手段であったかどうか、それが判明した時、すなわち今後の自主的行動の仕方にかかっているだろう。

ソ連はソ連刑法六十四条国家反逆罪でもソルジェニツィンを追求したようであるが、最高会議幹部会令により追放となったようで、私達には今日なおくわしい事実はわかっていない。ソ連市民権のはく奪は最高会議幹部会令により実施できることになっている。

宮本日共委員長はこの事件に対し、「ソルジェニツィン氏の全作品の全訳はまだないが、これまで読んだ範囲では、ソルジェニツィン氏自身は社会主義の理想を失っている。本人がひどい体験をしたせいもあろうが、弾圧を社会主義の不可避的産物との見方がある。そうした問題は大いにあるが、堂々と作品を発表させて、国民の前で論議させなければ、矛盾は果てしなく続く。」と述べている。社会主義の理想、弾圧を社会主義の不可避的産物との見方、果てしない矛盾など日共独特の「くさいものにフタ」的言辞で、本質的問題の肉薄にはまだ迫っていない。

仏共産党は十五日付党機関紙「ユマニテ」でソ連政府の措置を当然とし、「ソルジェニツィン氏の国外追放」は同氏の挑戦に対するソ連政府の当然の対抗措置である」「最近の著作で過去へのノスタルジアと社会主義への敵意をあらわにみせている」と書いている。

☆　☆　☆

なお国内では「猿払事件」「徳島郵便局事件」「総理府統計局事件」の公務員の政治活動の自由をめぐる三つの国家公務員法違反事件の口頭弁論が終り、判決がまたれている。これらの刑事事件は公務員の表現の自由に関するものであり注意されねばならない。

☆　☆　☆

西独における企業の共同決定方式は政府原案がまとまったもよう。それによると従業員二千名以上の全産業が共同決定方式を採用するよう法制化されるもよう。

☆　☆　☆

去年の今頃は石油工場の爆発に話題をさらわれていた。今年、今振返るとそれらのことがかすみ、石油危機による派生的事件のみが目にうつる。石油危機と石油工場の爆発では質がまったく異なる。しかし、それだからといって石油工場が爆発したという事実をかくも忘れ去っていいのだろうか。

ラディカルとアナキズム

山中邦久

(I)

日本における現代のアナキズム理論に関する文献がどれ程あるのか、私は詳しく知らない。それ故小論は、一学徒の不勉強な試論として多少の不備な叙述は御諒承願いたい。

現代社会の流動化は、人々を混乱と不安の中におとしている。だが、それは既成文化に対する批判的理性を生み出すような、ひとつの知的なチャンスを切り開く。今日における科学文化と非科学文化の対立は、むしろ有望な状況であって、民衆はその中に人間性の理念を守りつづけてきたと云えるだろう。現代の分極化した中で、それは人間自身の自覚と対立であるところの「アナーキー」な状態と云えるかも知れない。今、個々のそうした状況を詳しく述べる余裕はないが、それらをひとつの流れとしてとらえることは可能だろう。私は、現代の流れを楽観的に観察し、展望しているかも知れないが、主流、反主流といった大きな既成のワク組みの中で、見落してしまいそうな大切な芽を見守りたいと思う。そして、私自身をその中にどう位置づけるべきかという必要性を感じているのである。

(II)

アナキズムは、現代文明の加速度的な発展の中で、非科学的なユートピア思想として片隅に追いやられてきた。確かに、資本主義社会は、技術的完成の進展によって安定化に成功してきた。が、同時に今日ひとつの行き詰まりを示している。それはテクノロジー文明が、文化のもつ超越的な目標を排除しようとする傾向を、さらに人間性実現を明らかに妨害するまでに成長してしまったことである。だが科学は「自らがこうした状態との矛盾に陥るような認識や生産力の水準に達している。つまり『純粋な』科学的合理性は、全地球上の欠乏と不正を一掃する現実的可能性をうちに含んでいる。」①と云える。それは「科学自体が体制確立のために手を貸してやった当の支配層から科学を解放すること」②を意味する。そのためには、先進工業国に支配的な文明が望ましいとするような思考、行動様式とはうまく適合しない精神的能力や一個の知的意識を必要とする。文化は、反逆者に担わ

れる。それは、まず現代文明の否定にこそ現われるのである。「人間のもつさまざまな可能性の制度的な破壊に対する告発として、それは、既存の文明が『ユートピア的』と中傷したひとつの希望に身を託」③すことであった。科学と権力の分離は、科学のもつ明証性によって、依然として有効な問題内容が歪められ抑制されたりするという事実によって、人類の発展にある根底的に進歩的な可能性を暗黒の世界から導き出すだろう。そして「これらの可能性を集約できるひとつの命題は、人類は平和の世界 — 搾取と悲惨と不安のない世界 — をつくることが技術的にはできるような歴史的段階に到達した」④というアナキズムの実現すら予測するのである。

リベラリズムのもつ本質的な二面性は、テクノロジー文明と人間性の文化という要素を滞びている。「リベラルは頭脳の中で、観念として民衆を好」⑤み、リベラリズムは、その現わした諸理念 — 自由、平等、友愛といった人権理念 — を実現したことは一度もなかった。現代は、様々なレベルで公表された目標と実際の姿の不一致を露呈している。国家の「操作」で覆えない、それ自身の価値体系に対する矛盾に後期資本主義の現実は陥っているのである。60年代に新しいラディカリズムが登場したのは、こうしたリベラリズムの終焉との対応においてであった。戦後、無数の青年、知識人の意志が希望にめざめ、平和と独立と民主主義の理想に向って多様な形で動き出したが、それらの行き詰まりがそこに結実したと見るのも決して無理ではなかろう。日本の現実の中にある壁につきあたって、青年たちはその困難さの中ですぐ出発点に逆戻りしてしまう。それは、まだ日本の現実に耐えるだけの運動の理論がないこと、彼らを支え、互いに結びつける統一的な力がないことを示している。同時に、リベラリズムのもつ、「つまり、自由、平等、正義、個性といった理念のもつ歴史的友効性は、まさにそのいまだに実現されていない内容にあったのでありー言いかえれば、これらの理念が既成の現実に関係づけられなかったという点にこそあったのである。」⑥そして、そこにラディカルの発生とその課題があったと云えるだろう。

(III)

「どんなに数量化された『科学的な』資本主義でも、依然として人間に対する数量化されたテクノロジカルな支配である。」⑦またテクノロジカルは官僚制、すなわち確実に計算できる「知識による支配」と切り離すことはできない。ラディカルの登場に関して、知識人の側が

表面化したのはそのためである。同時に、それは知識そのもののラディカル化を意味した。

人間の法的平等はおろか知的平等まで求めて「自分たちだけがある特権を与えられて他の特権を獲得できなかった人々の上に立つことを厳しく自己否定しようという」全共闘運動の提起した問題は、専門的知識の所持（知的優位）を一つの社会的特権として行使するような社会層の存在という「身分的利害状況」に対し、「技術的合理化」の流れに抗するということであった。知識を私有財産化し、知識を競争によって得られる抽象的原理へ達することによって最高のものになるという信仰は、常に知識人が民衆を見下すときのイデオロギーとなってきた。過去のものとなった大衆の意識に媚び、入試をテコに体制的秩序内での上昇志向を年次的に確保する装置である教育機関。「学校時代の優等生が日本文化の代表選手になり、優等生制度と優等生精神で次代を教育した。だから日本文化は、構造的に優等性文化である。」⑧同時に鈍才は、秀才以上に秀才根性であることを、スチューデント・パワーは知的反乱を通して次々に大衆に公表してきた。そればかりでなく、今や大衆化しながら依然として非現実的な高等教育の中で、価値観の混乱という現実との対応を任せることもできない大衆知識人の絶望は、公共性を原理的知識が独占していることを明らかにした。それは「近代主義的前衛」をも解体することであり、高等教育を受けた人間が民衆の生活現実・生活意識から離れていくかぎり「この矛盾に満ちた現実を変革していく主体として、近代的、民主的人間類型のかわりに、マルクス主義的、社会主義的人間類型を外から持ってくるのでは、『近代主義』の誤りのくりかえしに過ぎない。」⑨ことを教えたのであった。知識人は今や、自分が置かれている社会的状況を把握することなくしては、人間としての価値座標を設定することはできない。知識と生活の分離は、リベラリズムの本質であり、リベラルな学問を受容しているかぎり盲目的勝利者とかわりがないのである。そして、知的独占の特権的分け前にあずかる機会を確実にもつ者以外は、既にこの本質を知っていた。それを可能にするのは状況認識の正しさを手にして、しかも状況から自律しうる主体の思想的形成を必要とすると云えるだろう。

リベラリズムは、それが支配階級のイデオロギーである限りにおいて、小ブルジョアジーの幻想に支えられながら「洗練された保守主義」として国家と巨大企業の結びつきを正当化する独占ブルジョアジーのイデオロギーとして存在してきたのである。60年代の危機の時代、階

級的矛盾の激化した時期において、ラディカルの攻撃の主要な目標となったのは、まさにそのためである。社会科学は、成立当初よりすでに社会的・人間的な危機状況の所産であったが、その二つの主流、すなわちリベラルな社会科学と社会主義、特にマルキシズムは、異質性と共に今日、ひとつの共通性 ― 社会体制の収斂 ― を現わしている。それは社会科学そのものが内含する科学性の問題に起因しているのかも知れない。社会主義は当為としての社会理念をまず前提として掲げ、その社会的実践に真理的価値を見出そうとしてきた。また現代社会学は、没価値あるいは価値自由を表看板にしてきた。もっとも、文化事象の本質と思われる理念を決定するのは、その時代の主導的な価値観であって、「現代社会学の主流は、主として冷戦の立場に立つリベラリズムのつくり出したもので、彼らの大部分は科学の名において特権的地位からアメリカの巨人作用を観察し、合理化することで満足してきた」⑩のである。マルクーゼの批判するウエーバー流の形式合理性の「純粋」な諸規定のうちには、無意識的に資本主義に固有な価値観が入りこんでいるということにある。リベラリズムは、現代の資本主義的合理性と合理性一般とを同一視する。しかしマルクーゼから見れば、形式合理性とは一般的なものというより、その「社会的実質」から見てみると、特定の歴史的限定の下での「支配の合理性」と結びついた特殊なものであって、この点を見損じたウェーバーは必然的に「質的に異なる合理性」の問題意識に欠けることを指摘している。グレイは次のように云う。「社会学者は新しく獲得した〝科学的〟地位を祝福するかも知れないが、事実はむしろ真に価値自由であることとは反対に、社会学者は現在の価値体系の専門的待女になっていたのである。実際、自分自身で価値判断することを拒否することによって、彼らは暗黙のうちに他者の価値をうけ入れていたのである。社会学者はもはや真に知的でなくなり、価値に関して決して慎重でなくなった現在のエスタブリッシュメント（体制）に奉仕する雇人、相談役、技術者という新しい役割を担うに至ったのである。」⑪他方、人類にパースペクティブ（展望）を与えてきた社会主義は、歴史的必然という実証できない縦のものから地理的な横の社会体制として比較されるものになった。社会主義は、リベラリズムがブルジョアジーのイデオロギーである限り、自由、平等といった理念を実現できないこと、すなわちそれら諸理念が人間解放のためのプロレタリアートの普遍的倫理価値になったこと、その実現がプロレタリアートに課せられた課題であるという革命の正当性を明らか

にした。だが、それらは党派性のもつイデオロギーを改学的真理と思いこむことによって、リベラルな社会科学と同じ結果を招いたのである。政党は明らかにイデオロギーによって行動せざるを得ないのであり、それを科学的と主張し、そこにひそむ誤りを自覚しなかった。思想的なものを科学として主張し、その科学性ということで他の思想を圧迫し、青年たちに献身と従属を要求してきたのである。マルキシズムにおける「優等生的」進展は、青年たちを一つの困難からすぐに「一体何のためにやっているのだ」という素朴な原始形態の疑問へ追いやり、彼らを挫けさせてきた。そうした状況の中で、〝科学〟の信仰から脱し、もっとも基本的な動機を、自分自身の体験の中からはっきりつかみ出してくる操作が、思想を自分自身のものとするために、まず必要な手続きであったのである。現代社会の流動化は、階級社会論的な価値体系が追いつかない、制度自体が追いつかない、「アナーキー」を生み出している。「操作」にさからって「考えること」を要求している。そして、「思考は、解放のための一前提たるあの意識の発展に寄与できるのだ。」⑫

デモクラシーにせよ、社会主義にせよ、本質的に人間を、思想をどこまで制度化できるか、という理念型の類型概念的社会科学と云えるかも知れない。ラディカルは、そのことを個人と社会の本質的葛藤として否定する。それは根源的に制度化できない人間性のアナーキーを意味している。現代の流動化はそのことを現わしているに過ぎないのである。その混乱は、人間性の次元の、経験からの分離ができず、精霊や幻想の神秘主義をはやらしたとしても、同時にラディカリズムによって、独占資本主義の支配する社会の規準との対応のうちに、リベラリズムを内的批判の概念として、それに内在するパースペクティブをうち立てる可能性を生んだのである。この意味でラディカルとは、一般には既存の体制と真に対決し、社会の根本的変革を志向することであり、ラディカリズムとは、一つのイデオロギーによって示されるものではなく、現在の支配階級、帝国主義と独占資本に反対するものの共通の立場ととらえられるのである。ジマンスキーの云うように「ラディカル社会学者の役割は、人々の個人的問題、日常生活上の問題を社会構造のダイナミックスと結びつけ、そうすることでそれを公的問題におきかえることでなければならない」⑬ず、同時に「自らも人間であることから出発し、人間的苦悩に対する同感と人間の自己実現に対する根本的なかかわり合いをもたなければならない」⑭のである。そこからさらに「ラディカル

社会学者は抑圧的社会構造の犠牲者との基本的連帯感をもたなければならない。すなわち、彼はみずからが抑圧されているものとして、大衆の解放運動とより人間的な新しい社会の建設をめざす運動に参加することをめざさなければならない」⑮のである。そこに「人間が直面している実際の問題解決に役立つ社会学の定式化と普及」⑯というラディカル社会学の目標があると云えるだろう。ラディカル社会学は、その明確な分析から、資本主義の経済構造によって権力の性格が規定され、同時に独占資本が国家を従属させ、国家にゆ着し、国家の目標と目的を規定していることを導き出した。さらに支配における「民主化」とは、政治エリートの選択の規準の民主化を意味し、これから経済的政治的権力の方向や目的がかえられるものではないという、国家独占資本主義段階における権力論として、階級的視座を明確化したのであった。

ホロヴィッツの云うように、知識が権力から分離していく過程の中で「このような分岐の結果として、現代社会は自然的アナキストの最初の集団をつくり出した。自然的アナキストとは、エスタブリッシュメント体制内への吸収に抵抗する人たちであり、体制への忠誠の反政治的拒否がインテリであることの自己規定の要素となっている人たちである」⑰だろう。「社会生活がこのように分極化しているため、アナキズムは現代社会を構成する一要素として存続してきた。インテリは、社会的訓練と個人的習性によって反政治的である。アナキストは知的確信によって反政治的である。これら二つの要素の結合が、今日のアナキズムの視点を画定している。」⑱現代は「解決を求めて争われる公的諸問題と私的な苦痛とが発生する基盤」⑲であり、「同時に、生のこのような二分割は、公共的政策と個人的倫理とをすっかり分離させることに基盤をおくものである。」⑳こうした状況で、ラディカルな「知的活動は、その姿勢がだんだんアナキズム的になってきている」㉑のは明らかだろう。それは「知識の所有」による「実務的」な有利さを「意識的に拒否するような個人的倫理法則を形づくろうとする試み」㉑でもある。そして、同時にそのことがあくまでも「インテリの倫理」という限界をもつことも認識すべきである。「イデオロギー的思考によって起こされた行動なしには、いかなる階級も、階級として存在しえない、ということは現代における事実である。この理由によって、階級としてのインテリが活気づけられ独自の活動をするようになることはありえない。他方、知識階級は、暴露という伝統 — 政治的神話と社会的イデオロギーというものがもっている弱点をあばき出すという — 伝統だけによって存続しうる唯一の階級である。

このような真相摘発にアナキズム的傾向を与えれば、アナキズムと知性主義との『同盟』が実現されると期待できよう。」㉒

Ⅳ

ラディカルは大衆にとって、自らの権力化を促す。テクノロジーの発達をエンジンとした加速度的な工業化社会は、猛烈な社会変動をよび、大衆の価値座標を確定させず、常に不安の状態に陥らせている。その不安をラディカルは、欲望や衝動すら人為的に「流行」といった企業の追求する利潤のサイクルの中で管理されている社会状況の認識、さらに考える時間的な幅を含めた価値観の座標をどう設定していけるかということの自覚のうちに解消しようとしている。その自覚をいかに共有できるか。そういう自覚の共有を基に闘う場合の民衆の運動の原理は何か。それらの問に、アナキズムは豊な解答を用意している。ラディカリズムの闘いの中で、資本主義ベッタリの価値意識の転換を可能にしたインテリの役割、すなわち社会的責任の自覚は、大衆に対して「誰が何をどうやっているかということから目をそらさせない」機能を果す。そこから民衆運動があらゆる支配を拒絶するという消極的な「アナーキー」の方向を生むと同時に、積極的なアナキズムの可能性をも描いていくのである。民衆は資本の合理主義に対し、「怨念」といった感性の非合理性しか武器にするものがないとされてきた。だが、ラディカリズムはその展開の中で、日本の公約的イデオロギーが自然の非合理的感性化であること、そしてそれは現代社会という「存在」が変革されてはじめて克服されるということを明らかにした。同時に、ラディカルな大衆運動は上からのイデオロギー的大衆運動の拒絶の中から、これまでのどんな運動もが主張したことのない政治原則の実践的主張者であり、担い手である「主体としての民衆」という事実を示した。イデオロギーの対象としての大衆でなく、民衆自身の同化しているイデオロギーとして、それはひとつの原理を明らかにしつつある。

「怨念」は民衆の間にかわされる優しさ、連帯の感情であり、それは日本の古くからある伝統的共同体の底にあるものとして、近代主義的発想ではとらえられない部分として表出している。それは民衆の沈黙の中に深く潜在し、民衆が身を守る武器として、下からの「匿名の思想」として日本の社会の中に沈澱してきたのである。それは民衆が生活の歴史の中から摑み出して来た行動様式のシステムであり、リベラルな思想の欠いていた牙、すなわち「行動の原理」をもっている。それは一面、民衆の心

理に密着し、他面、民衆の生活の条件に密着している。そして、思想としての表現となるよりも現実の生活過程にかえって、再び生活を押し進めるところに本性があると云えるだろう。

住民運動を前提として民衆は、生活防衛としての抵抗運動をきっかけに、政府とその対立者としての革新政党を含めた生産力ナショナリズムにつらぬかれた近代主義的エリートの合理的支配を批判し、実践の中の原則として「生活価値」を他のすべての諸価値に優先させていくという価値変革のイデオロギーをもちつつあるのである。その意味で、民衆は本質的にアナーキーである。これからの民衆運動は、ラディカルな知識を必要とした、ある程度の勇気と社会責任の自覚のある者なら誰でもできるような運動形態を広げていくことであるだろう。それは平和や民主主義のイデオロギーに喰いつくのではなく、その団体に参加するのでもない。工場で働き、魚を売り、飯をたき、子供を生み、育てるという問題をイデオロギー化するところに、すなわち具体的な生活のイデオロギー化にあると云えるだろう。同時にその中に、自由、平等、友愛といった倫理的諸価値を関連づけていくことで共同体としての展望を得ることによって、「何か理想がなければ、いつかは壊れてしまう」という現代の共同体の閉鎖性をのりこえる可能性もでてくるのではないだろうか。

Ⅴ

丸山真男の教えるように、西欧やアメリカで、今日でも民主主義の基本理念や、その基礎づけが何百年来のテーマとして繰りかえし「問わ」れ、真正面から論議される状況に比べ、日本の知識人がそれらを「分かりきったもの」として済ませてきた責任は重い。ハイカラな外装にかくれ、言葉を知らない民衆を近代化した、いや前近代だといった二者択一的規定がかわるがわる「反動」をよびおこしてきたのである。同時に民衆は、自らの変化を定式化しなかった。そして「むしろ過去は自覚的に対象化されて現在のなかに『止場』されないからこそ、それはいわば背後から現在のなかにすべりこむのである。」㉓だが今、ミナマタは石牟道子という言葉をもった。三里塚は牧瀬菊枝を、戸村一作をもった。久野収は彼らについて云う。「ミナマタは、石牟礼道子を通じて、一つの記録を世に送り出した点で、田中正造をつなぎながら、こえている。彼女は共同生活体の〝語部（たかりべ）〟となってミナマタの経験をひろく外側に手わたした。ここではミナマタ住民の抵抗体験の記録が、その底深い動

機、〝怨念〟の動機から行動のすみずみまで記録されていく。普通の場合、私的〝つぶやき〟として歴史の表面からアワのように消えさってしまうはずのめいめいの〝私怨〟が記録されることによって、かえってその公的意味がはっきりと浮き出てくる。」㉔それは「社会科学的闘争分析などといった格好のよい、没価値的記録ではない。石牟礼の主観を通じて、ミナマタ住民の歴史が客観的に姿をあらわすのである。」㉕ ―これらのコミニケーションによる連帯こそ、ラディカルのもたらした大きな成果ではないだろうか。同時に、イデオロギー暴露から、一定の原理的立場からするイデオロギー批判がラディカルの課題となるだろう。その意味で、本質としての民衆のアナーキーを歴史から発掘していくことを、さらにコミュニケーション連帯を広げていく「新しく充実した人間と人間関係をつくり出す豊なモラルの誕生と人間的な諸条件を可能なかぎり充実させながら人間同志の思惟的結合を実現しうるような」㉖共同体の倫理という「方法論の探究」こそ、アナキストに、と云うよりむしろ、今の私にかけられた唯一の課題ではないだろうか。(以上)

(注)

①②③④⑫ 「文化の新しい定義のための覚え書」マルクーゼ（井上純一訳）せりか書房

⑤ 「市民運動の組織論」アリンスキー（長沼秀世）未来社

⑥ 「倫理と革命」マルクーゼ

⑦ 「マックス・ウェバーの著作における産業化と資本主義」マルクーゼ

⑧⑨ 「岩波講座・現代思想 月報3（悪魔の眼について）」山下肇

㉖ 「 〃 〃 （思想と科学）」遠藤湘吉

⑩⑪⑬⑭⑮⑯ 「アメリカ社会学におけるラディカリズム」河村望（社会科学の方法・七三・九月号）

⑭⑱⑲⑳㉑㉒ 「アナキスト群像（アナキズムの思想史的展開）L・L・ホロヴィッツ（今村 訳）社会評論社

㉓ 「日本の思想」（岩波新書）丸山真男

㉔㉕ 「朝日ジャーナル・一九七四・一・四（神は細部に宿りたまう）」久野収

他にウッドコック「アナキズム」、大沢正道「アナキズム思想史」、D・ゲラン「現代のアナキズム」、芝田進午編「現代日本のラディカリズム」、G・グリーン「マルクス主義かアナキズムか」、田口富久「『パワーエリート』再論」など参考。